

2017 事故防止・経験交流集会 開催報告

教遭委員 伊東春正（かがりび山の会）

今年も教育遭難対策委員会主催／救助隊協力で11月11、12日に大山青少年研修センターにて事故防止・経験交流集会を開催した。

今回は、11の会から35名の参加があった。

1日目は、まず事故報告をした。妙義山の転落事故では、ロープ長が不足していたうえに末端処理がなされていない、鋸山の訓練中事故では計画外の転落模擬訓練をやったの事故で、これらは高難易度なことをやっている中で、基本的なことが守られていない。

牧馬沢（マキマ）の滑落事故は、労山会員と他山岳部員との二人で行った山での事故である。かがりび山の会でもネット仲間山行（Facebook 仲間に呼びかけ、興味のある人がすべて自己責任で参加している）が行われていて、会としてどこまで責任を負うのか考えさせられる。

マダニ咬害はこれまで関西以西と言われてきたが、現時点では日本全国にあるとのことである。

今回の事故報告は、事故後に現場検証を行い、現場写真を示しながらの報告であったため、事故がより身近に感じられ効果的であった。

全国事事故事例研究では、各会混合で4班に分かれて、自分たちだったらどうするかで観点でディスカッションした。

事例1の徒渉での死亡事故は、増水した沢での渡渉は危険であり、水が引くまで待つべきとの結論となった。

本集会に向け教遭委員と救助隊との事前打合せで、7点セット（10m補助ロープ、3本のスリング、3個のカラビナ）でできる範囲の渡渉方法を教えるべきだという意見と、中途半端な装備で渡渉はやるべきでない、との意見とがあり、結局7点セットでは、渡渉はやるべきではないということになっていた。

やはり山は安全を最優先しなければならない、ということである。

事例2の岩場ハイクでの転落死亡では、大人数の山行であり、1パーティ10名ではリーダーの目が行き届かず、せいぜい5,6人であろうとの意見が的を射ていたと思う。

救急法等のデモでは救助隊を中心に、山行中に救助要請を受けた場合の対処を、安全確認～状況確認～患部固定～ヘリ要請～搬送～負傷者引き渡しまでを、役割を決めて寸劇で行った。山岳看護師とベテラン救助隊員の指導で緊迫したデモであった。

夕食での交流会では、写真にもあるように、夜遅くまで話は尽きなかった。

2日目は、救急法と搬送法訓練および七点セットを使った下降訓練を行った。これらは反復練習が重要であるので、毎回取り上げて各人が実地訓練している。

最後の渡渉模擬実演では、10m 補助ロープでの渡渉は危険であることを示し、実際に沢経験者がやる 30m ロープでの渡渉を実演した。

以上、二日間で取り上げた、事故、事例、実演および当日配布した資料には参考にするべき点が多々あるので、それぞれの会に持ち帰って啓蒙活動に活用していただきたい。

プログラム

1日目（13時～21時）

①最近の事故報告

- ・妙義山の転落事故（茂原道標山の会）
- ・鋸山の訓練中事故（岳樺クラブ）
- ・マダニ咬害（千葉こまくさハイキングクラブ）
- ・牧馬沢（マキマキ）の滑落事故（ちば山の会）

②全国事故事例研究（ディスカッション&発表）

- ・事例1：穂高滝谷出合で徒渉での死亡事故
- ・事例2：岩場ハイクでの転落死亡事故

③救急法等のデモ

④夕食／各会紹介／交流会

2日目（8時～11時30分）

⑤救急法と搬送法訓練

⑥七点セットを使って安全に下降する技術の訓練

⑦渡渉の模擬実演

<交流会開会挨拶>



<事故事例研究 発表状況>



<救急法・搬送法 実演/訓練>

<楽しい夕食での交流>



参加者の感想

かがりび山の会 山本久美子

近年は高齢登山者の山岳事故を多く見聞きします。かがりび山の会でも会員の高齢化が進んでおり高齢を理由の退会者がいる一方で、同年代の意欲的な新たな入会者もおります。募集山行は入会して山仲間と山行を一緒にする楽しさや、登山の山域も広がり経験が積めるなどプラス面が優先してアピールされます。入会希望者も同様にメリットを考慮します。

しかし、安全登山は絶対ではなく未熟な技術や知識は、本人のみならず山仲間を巻き込む登山事故へ直結する恐れも生じるのが現実です。県連の事故防止・経験交流集会は情報を共有し、事故回避の勉強や安全登山の意識を高める意味においても、ベテランのみならず新入会員への積極的な参加を推進したいプログラム内容でした。